

ナーダムの社会的機能について —スフバートル県の2事例より

尾 崎 孝 宏

1. はじめに

小論の目的は、モンゴルにおける民族的スポーツ大会である「ナーダム」の機能を、それが開催される地域社会の文脈から考察することにある。また、主な考察対象は、後述するように筆者が現地調査を行ったモンゴル国スフバートル県の2事例、つまり1997年7月のオンゴン郡における「ソムのナーダム」および、1999年8月のダリガンガ郡における「アルタン＝オボのナーダム」である。この両者は、その動機、規模などにおいて大きく異なるものであるが、まずは両者の共通項である「ナーダム」に関して以下に簡単にまとめておく。

現在、ナーダムといってまず想起されるのは、モンゴル国の「国家ナーダム」、つまりモンゴル人民共和国時代より行われている人民革命（1921年）を記念するナーダムであるが、それも含めた一般的なナーダムの解説としては、蓮見の説明がまずあげられよう。

ナーダムとはモンゴル語で「遊び」の意味であり、夏の終わりをいろどるモンゴル最大の行事である。ナーダムとはモンゴル語で男の三つの遊びといわれる弓・競馬・相撲の三種の競技が行われる。これをみるために人々は何日でも、数週間もかけて集まってくる。

伝統的なモンゴルの習慣によれば、このナーダムというのはオボ祭りの一部として行われた。オボ祭りとはすべてのモンゴル族に共通する宗教行事であった。そのために、モンゴル国では1921年の革命後、中国内モンゴル自治区では1950年代初めごろから、本来的に重要なオボを祀る部分が禁止さ

れ、全体の一部であったナーダムだけがスポーツ大会として許可されていた。(蓮見 1993:131)

もとより、個別事例を挙げれば簡単に例外を指摘できるが、社会主義時代のモンゴル人民共和国における国家ナーダムでは、現在のスタイルから想像されるより「スポーツ大会」色の強かったことを指摘しておくことは無駄ではあるまい。マイダルの描写する社会主義時代のナーダムからは、近代社会主義国家としての国家儀礼にふさわしい体裁のイベントであったことが伺われる。

モンゴルにおける、現代のナーダムは、民族的なオリンピック競技を思わせる。ここでは、モンゴル相撲、競馬、弓術の試合が行われ、多種目につながる現代スポーツ（バレーボール、バスケットボール、フットボール、競輪、陸上競技など）の競技会が開催される。

1921年以来、この祭典は、モンゴル人民共和国独立宣言記念日、すなわち7月11日⁽¹⁾にはじまり、数日間行われる。

ナーダムは首都だけでなく、あらゆる都市、県や郡の中心地で祝われる。(マイダル 1988:123)

なお、井上の指摘によれば、1990年代に入ってから国家ナーダムは、1996年からは「革命記念『第〇回』」という表記が姿を消すなど、人民革命よりも「チンギス・ハーン以来の伝統」を強く打ち出したものへと変化ると同時に、「国民のための祝祭」として1997年からプログラムに上記のような近代スポーツが再び盛り込まれたという⁽²⁾ (井上 1998:231)。つまり、ナーダムの「意味付け」をめぐる動揺が見られるといえよう。

一方、ナーダムは必ずしもこうした国家レベル、あるいはマイダルの記述に見られるような国家レベルのナーダムに連動したのものに限られるわけではない。地方政府やそれに類する団体によって、あるいは全くの個人によってすら開催され得る。その名目は、オボー祭り、長寿記念、あるいはウスニイ＝バヤル（髪切り儀礼）であったり様々であるが⁽³⁾、いずれにせよ、主催者側の「名目」あつてのナーダムである、という点は共通である。つまり、ナーダムのためのナーダムであつてはならず、その開催には正当な「動機」が必要であり、

その動機に基づいた広義の儀礼の一環としてナーダムが行われる，という論理構成になっている。

しかし，この論理付けはあくまでも「主催者側」の論理である。こうした主催者側のメッセージを，見物人や参加者は「共有すべきである」ことが求められるのであろうが，それは必ずしも見物人や参加者が実際に「共有している」ことを保証するものではない。事実，見物人や参加者がナーダムに集合する動機が主催者側のメッセージと異なっていると推測される事例は，オポー祭りやチベット仏教の廟会といった，いわば「伝統的」な儀礼に伴うナーダムが行われていた時期の報告書からも見出すことができる。例えば，1930年代初頭に内モンゴルのシリソグール盟で調査を行った水野は次のように述べている。

オボの祭は大抵旧暦の五月の中頃に行はれます。廟の祭は五月から六月の候に区々行はれます。祭そのものの儀式はその社交的な賑やかな光景に打ち消されて誰も口に上しませんから，その時にその場に臨まなければわかりません。それと反対にその日には跳鬼，競馬，角力は必ずつきもので，祭とはこればかりが見物だと云はぬばかりにこのことに就いては生々と話し会ひます。或はそう云ふ所にこれ等の祭の意義があるのかも知れません。
(水野 1932：84)

これを読む限り，見物人や参加者にとっての意義は儀礼そのものではなく，むしろ非日常的な空間に現出する「社交」やナーダムなどの「見物」にあった，と理解しても不当ではなかろう。つまり，ナーダムとは，主催する側の動機と，見物・参加する側の動機という，場合によっては相違する動機が相互作用する場として営まれている，といえよう。

振り返って，従来のナーダム研究に関して述べれば，儀礼研究 (Ex. 楨 1941, 後藤 1956), ナーダムで行われる個々の種目に関する研究 (Ex. ボルドー 1998), あるいは主催者の形態変遷に着目した歴史に関する研究 (Ex. 井上 1998) などの形で存在した。その一方，ナーダムが行われる社会の文脈における上述の如き相互作用や，そこから生み出される社会的機能に関する考察は皆無であった。かろうじて，文革時代の東ウジュムチン旗に関する記録を

残した張の言及に、地域社会の文脈からみたナーダムの意義が述べられている程度である（張 1986：103-113）。

つまり、本論の試みは、単なる個別のナーダムのプロセスを事例として紹介するのみにとどまらず、ナーダムをめぐる地域社会のダイナミクスをも分析することであるといえよう。具体的には、詳細なナーダムの流れとともに、その開催動機、および見物人・参加者の言動を記述することでそうしたダイナミクスを捉える、という方法論を採用する。なお、競技参加者については、筆者の調査地域が「競馬」に対してことさら強い愛着を感じる地域であることもあり、競馬に最も主体的に関わる⁽⁴⁾ 調教師（オヤーチ）の言動が中心になることをあらかじめお断りしておく。

2. 事例1：「ソムのナーダム」（1997年7月）

本ナーダムは、1997年7月11日と12日、つまり国家ナーダムと同一の期日にスフバートル県（アイマク）オンゴン郡（ソム）で行われたものであり、現地で「ソムのナーダム」と呼ばれている。開催場所はソム中心地の西外れにある仮設の「ナーダム広場」（相撲場も兼ねている）であり、広場の北西300メートルほどの地点に競馬のゴール地点がある。行われた種目は相撲と競馬のみであり、開催動機については後述の具体的なプロセスでも明らかなように「人民革命76周年記念」であった。

ナーダムの具体的なプロセスは次のとおりである。なお、時刻に関しては実測値であり、事前のプログラム配布等に行われなかった。また、筆者は本ナーダムの調査で7月5日より現地入りしていたため、競馬の予行演習に関するデータもあげておく。

7月7日

「イフ・オラルダーン」開催。これは競馬のオープン戦であり、開催場所は本会場とは別で、ソムから北北東10キロにある高台上の草原。なお、7月3

日には「バガ・オラルダーン」というオープン戦が同様に行われた。「イフ・オラルダーン」の場合、10:25開始、17:00終了。出走順はアズラガ（種馬）、イフナス（成馬＝6歳以上）、ソヨーロン（5歳馬）、ヒャザーラン（4歳馬）、シュドレン（3歳馬）、ダーガ（2歳馬）。

7月10日

牧民がソム中心地に集まり始める。彼らはゲル持参で、ソム中心地北側の草原に幕営する。

夜、テレビとラジオで国家ナーダム記念コンサートを中継する。なお、10日以前は燃料不足により停電であった。

7月11日

- 9:15 ソム中心地東郊に駐屯している国境警備隊の兵士100名ほどが会場へ向けてパレード。
- 10:15 アズラガがナーダム広場より、22キロ離れた出走地点へ向けて出発。この直前より人々が会場へ集まる
- 10:30 ソム長の開会宣言。「人民革命76周年記念ナーダム」という言及あり。なお、ナーダム会場正面に位置するVIP席には赤文字で「親愛なる皆様モンゴル民族の大祭典ナーダムおめでとう」と書かれた看板が掲げられている。
- 10:40 相撲の1回戦が始まる。参加者は64名で、6回戦までのトーナメント方式。
- 10:55 ソムの北東で出火。騎馬の者は多くが火事を見に行き、ナーダム広場の見物人は一時半減する。
- 11:40 アズラガ帰着。帰着前に相撲の試合は中断され、これより昼休みに入る。ただし、会場近くのナイマーチン（商人）は営業を続けている。
- 13:30 相撲再開、イフナスが25キロ離れた出走地点へ出発。

- 15:40 イフナス帰着
- 17:15 ダーガが12キロ離れた出走地点へ出発。
- 18:25 ダーガ帰着。この後に予定されていた本日の競馬の表彰は、結局人が集まらず明日へ延期された。
- 20:00 調教師たちが翌日の出走に備えて馬を放牧に出る。

7月12日

- 8:30 前日の表彰の予定時刻だが、結局誰も現れず再び延期。
- 8:50 兵隊が会場へ到着。会場より「集まるように」とのアナウンスが繰り返されるが、誰も来ない
- 9:50 ソヨーロンが22キロ離れた出走地点へ出発。
- 10:00 前日の表彰が始まる。
- 10:45 相撲が3回戦から開始。
- 11:20 ソヨーロン帰着。これより昼休みに入る。
- 13:05 相撲再開、ヒヤザーランが18キロ離れた出走地点へ出発。
- 14:10 ヒヤザーラン帰着。
- 15:35 シュドレンが16キロ離れた出走地点へ出発。
- 16:50 シュドレン帰着。
- 17:10 「表彰をするので馬は集まるように」とのアナウンス。
- 17:55 各レースの入賞馬の表彰が始まる。
- 18:25 相撲の決勝戦（6回戦）。
- 18:35 相撲の優勝者、準優勝者の表彰で全プログラム終了。ナーダム中のみ日中も電気が来ていたが、14日より再び停電状態となる。

さて、このナーダムへの見物人・参加者の関わり方を次に検討しよう。まず、人民革命76周年記念ナーダムであるという点に関してであるが、そもそもソム長の開会宣言はPA装置の不良によりほとんど聞き取れない、というのが事実

であった。ただし、モンゴルの人々にとってはこのナーダムの公式的な意義は社会主義時代以来、言わずともわかっているものであるし、また、現地のインフォーマントにあえてこの点を問いただしたところ、人民革命はモンゴル独立と同義なのだから現在もそれを祝うことに問題はない、との回答であった。

だが、ナーダムの見物人・参加者は、ソム長の開会宣言に対して何らの感慨もなく、単に「始まりの言葉」としてのみ解釈していた、というのも否定できない。さらに、「人民革命」を想起させるもう一つの道具立てである国境警備隊のパレードにいたっては、ほとんど見物人も存在しない有様であった。

そもそも、見物人・参加者は自分に興味がある時のみ広場へ赴き、それが終われば自宅や幕営地に戻るという往復運動を繰り返しており、最も多くの見物人が集まったのは競馬のゴール時と表彰式であった。実際問題、広場はVIP席以外には日よけがなく、炎天下で長時間見物をするのは苦痛であり、また、ソム中心地の住民にとってはソムの相撲より家に戻ってテレビで国家ナーダムの相撲中継を見るほうが面白い、とオヤーチD氏および彼の家族は語っていた。

さらに、見物人の多くが馬でナーダム広場へ出かけることを考え合わせれば、ソム中心地と広場の間の1キロメートル程度の距離は無きに等しい。筆者は偶然、ナーダム広場でソム中心地北東部の家屋から煙が上がっているのを目撃したが、見物人のモンゴル人たちは即座に数十人が馬で現場まで駆けつけ、数分後には広場にも火事の様子が伝えられていたというエピソードは、彼らの距離感覚を推し量る上では示唆的である。

一方、見物者、参加者の構成については、いずれもオンゴン＝ソムに関係する者がその大半を占めている。見物者に関しては、ソム中心地に住む定住者、国境警備隊関係者、草原の牧民という狭義の「ソム住民」に加え、この日が全国的に休日であり学校の夏休み期間にも当たることから、ソム出身者とその家族も少なくない。見物人についての公式な発表はないので概数であるが、ソム中心地在住者（約2000人）はほぼ全員、加えて牧民も各世帯最低一人はナーダム広場へ赴くこと、また、ある世帯内でソム外のウランバートルやアイマク中

心地在住の者が存在しないケースは稀であることから、ソムの総人口に匹敵する3000～4000人程度がナーダム見物に出かけていると考えて差し支えないと思われる。なお、この数字は、もとよりソムの日常生活を考えれば異常な人数であるが、ナーダムとしては中規模な部類である。

そうした小規模さに対応するように、参加者は競馬では大半がオンゴン＝ソム内、それに隣接ソムのオヤーチが混じる程度であり、相撲にいたっては地元の青年と国境警備隊の兵士としてオンゴン＝ソム内に駐屯している兵士に限られる。ただし、競馬で騎乗する子供については、ウランバートルなどに住んでいるオヤーチの親族である場合も稀ではない。

少なくともオヤーチに関する限り、彼らの興味関心は競馬、それも自分の調教した馬の出走するレースに限られる。極端な言い方をすれば、それ以外はナーダム「本来」の意義も含めて「どうでもいいこと」であり、ナーダムの意義も自らの馬が出走したレースで勝てるかどうか、その一点に尽きる。オヤーチは競馬のオープン戦である「オラルダーン」の段階から、他のオヤーチと出会えば馬に関する情報交換を行っている。特に優秀なオヤーチは地元の名士であり、高齢者も少なくないことから、年齢に関する秩序の厳しいモンゴルの地方部では独自の階層を形成しているといっても過言ではない。

このように、モンゴルの男性にとって、自分の調教した馬がナーダムで入賞することは威信の源泉である。しかも、オヤーチは牧畜という生業と切り離せない行為であるため、仮に国家ナーダムに馬を出走させ、入賞させるような傑出したオヤーチであっても、普段は自分の生まれ故郷の草原で牧民として生活している必要がある。また、手持ちの馬は一頭ではない。そのため、地元でオヤーチを自認する人々にとって、自らの属するソムの公式レースである「ソムのナーダム」に馬を出走させないことはありえない。それがまた、「ソムのナーダム」の競馬で入賞することの権威性を高めているのだと言えるだろう。

これは、裏を返せば、なぜ「ソムのナーダム」における相撲の権威性、あるいはオーセンティシティーが低いのか、という問題の答えともなりうる。若いブフ（相撲取り）にとって、ソムのナーダムで勝つことは、彼らのキャリアの

第一歩に過ぎない。もちろん、それは彼らに相応の威信をもたらすことになるが、モンゴル国の相撲の位階システムにおいては、アイマクのナーダムで優勝して得られる称号よりも国家ナーダムで5回勝って得られる称号の方が上である。また、相撲を取るのは身一つであるから、上位のブフはウランバートルに常住するのが普通である。しかも、現在はブフのプロ化が進行しており、年数会のトーナメント戦が開催されているため、彼らはウランバートルに住む必要があるとさえいえる。そのため、ソムのナーダムで催されている相撲より、テレビの向こうで行われている国家ナーダムの相撲が「面白い」ということになるのである。ただし、この相撲と競馬のバランスに関しては、この地方が特に良馬の産地だからである、という指摘をするインフォーマント（オンゴン＝ソム出身、ウランバートル在住）も存在した。

もう一つ、ナーダムに欠かせない「参加者」が存在する。それはナイマーチン、つまりトラックなどでウランバートルや中モ国境のザミンウッドから雑貨や食品などの物資を運んでナーダム広場の近くで売りさばき、帰りには牧民から買い集めた皮革や毛などの畜産品を再び転売目的で輸送する行商人である。もとより、彼らはナーダムの時期以外にもオンゴン＝ソムに來訪しては商売を行っているのではあるが、ナーダムの際には20台近い、つまり20組近くのナイマーチンが顔をそろえる点、また、それがナーダム広場近くに集合して荷台に商品を並べ、仮設「商店街」の様相を呈する点で日常とは異なっている。また、酒類や飲料、菓子等の嗜好品の中には、オンゴン＝ソムでは通常見られない商品（Ex. 中国製のビール）も多く持ち込まれるなど、非日常感の強い商品構成となっており、広場で催される競技と同様に人々を引き付ける要素となっている。この他、ソム中心地の住民の中には、牧民を当てこんだ写真屋（ポラロイド写真を有料で撮る）や食べ物屋（ホーショールを牧民の幕営地に売りにいく）を開業する者も存在した。

3. 事例2：「アルタンオボーのナーダム」(1999年8月)

本ナーダムは、1999年8月1日～3日にかけてスフバートル県（アイマク）ダリガンガ郡（ソム）で行われたものである。開催場所はソム中心地の北2キロメートルほどにある仮設の「ナーダム広場」であり、広場の南300メートルほどの地点に競馬のゴール地点がある。種目的には相撲・競馬・弓のほか、シャガー競技、スタイルコンテストが行われ、さらに各種イベントも催された大規模なナーダムである。なお、開催動機については「アルタンオボーのナーダム」の通り、ソム中心地の北西に位置する「アルタンオボー」と呼ばれるオボーの祭祀に伴うものであり、その意味で「伝統的」なスタイルのナーダムであるといえる⁽⁵⁾。なお、このナーダムは1930年代以後途絶えていたものであるが、1990年より復活し、その後1995年に続き、1999年に開催された。

ナーダムの具体的プロセスは以下のとおりである。なお、本ナーダムは極めて大規模なものであった上に、見物人・参加者に割り当てられたゲル・テントの設営スペースが広場から2キロメートルほど北に離れた場所であったため、すべてのプログラムを実見することは不可能であった。しかし、本ナーダムでは事前に印刷されたプログラムが配布されたため、それに基づいてナーダムのプロセスを以下に紹介する。なお、競馬に関して「レース」とあるのは、ナーダム広場でエントリーを行い、出発地点まで移動を開始する時刻である。ただし、時刻に関しては実際には多少の遅れが存在した。また、競馬の距離に関しては前述の「ソムのナーダム」と同一であり、相撲の参加者は128名であった。

8月1日

8:00-11:00	見物客・参加者の受け入れ、設営場所の指定
11:00-15:00	ガンジュール経を捧げる儀式（特別プログラム）
15:00-17:00	側対歩馬（ジョローモリ）のレース（於：ナーダム広場）
17:00-19:00	競走馬のトレーニング時間
20:00-22:00	アイマク長のレセプション（於：子供ゾスラン）

8月2日

- 4:00-7:00 アルタンオボー大祭礼
8:00-8:30 アズラガのレース
8:30-9:30 ナーダム開会式（特別プログラム、於：ナーダム広場）
相撲1回戦
10:00- 弓、シャガー競技開始（於：ナーダム広場）
11:00 アズラガ到着
12:00-13:00 イフナスのレース
13:00-14:30 昼休み
14:00-14:30 イフナス到着
14:30-15:30 技術大学の関連校において寄進を捧げる儀式が行われる。相撲2回戦が開始、弓・シャガー競技の継続
15:30-16:00 ダーガのレース
18:00- アズラガ、イフナス、ダーガの入賞馬表彰
18:00- 休憩
20:00-22:00 コンサート（於：ナーダム広場）

8月3日

- 8:00-8:30 ナーダム開始、ソヨーロンのレース
8:30-9:00 相撲3回戦、弓・シャガーの競技開始
8:30-9:00 良馬、馬具、ダリガンガ族の銀製品で盛装した若者たちによるスタイルコンテスト
9:00-11:30 ガンガノールを祀る儀式（於：ボンバトオボー）
10:00- ソヨーロンの到着
11:30-12:00 ヒヤザーランのレース
11:30- 相撲4回戦
13:00 ヒヤザーランの到着
12:30-14:30 相撲5回戦開始、弓・シャガーの表彰式

14:30-	シュドレンのレース
15:00-	アルタンオボー宝くじの抽選会（於：ナーダム広場）
17:00-18:00	ソヨーロン，ヒャザーラン，シュドレンの入賞馬表彰
17:00-	相撲6回戦，7回戦
18:00-	ナーダム閉会式
20:00-22:00	歌・音楽・舞踊の上演（於：ナーダム委員会）

さて、このナーダムへの見物人・参加者の関わり方についてであるが、まず第一にアルタンオボーのナーダムというのは、古来より信仰の対象となっている四つの山⁽⁶⁾で90年代以降復活された、モンゴル国政府主催のナーダムの一つである点を指摘しておきたい。そのため、見物人・参加者についてもダリガンガ=ソムあるいはダリガンガ地方（スフバートル=アイマク南部）という文脈を超えた規模で集まっていた。筆者がナーダムに集まった車のナンバーを観察した印象としては、圧倒的に多かったのはスフバートル県とウランバートル市であったが、この他にも中部～東部諸モトイキのものが散見された。また、少数ながら外国人観光客もあり、モンゴル国営テレビの取材班も現地に來ていた。

以上の記述だけでも、このナーダムが極めて大規模なものであることが想像されるが、実際の人数については、オンゴン=ソムの牧民がナーダム以前に「6万人」という数字を挙げていた。これはおそらく、事前の見込みとして報道された数字であろうと思われる。また、ナーダムの規模は競馬の出走頭数、特にアズラガの数で言及されることも多く、オンゴン=ソム出身でウランバートル在住の筆者の友人がナーダム前に筆者に語った言葉を借りれば、「95年のアルタンオボーのナーダムには、450頭ものアズラガが出走したんだ。ウランバートルの国家ナーダムだって200頭ちょっと位だぞ」という具合である。また、このナーダムの時期には近辺のソム長は皆ナーダム広場の北にある設営スペースにゲルを構えて移動してきており、ゲルの入り口に「オンゴン=ソム」などと看板を掲げ、さながらソム政府が移動してきたかのような光景であった。

また、ソム住民は、多くが自らのソム長のゲル周辺に幕営しており、ナーダム広場でも、ソム政府やアイマク政府の提供するテントが見物人に対する唯一の日陰の供与となっていた。

さて、見物人のナーダム観戦についてであるが、基本的なスタイルとしてはソムのナーダムと何ら変わらない。見物人が多いのはウランバートルから来た芸能人が行う開会式のアトラクション、あるいはウランバートルからラマを呼んでの宗教儀式の類などであるが、宗教儀式に関しては、プログラムに表示されている時間の長さとは相反し、個々の見物人のレベルでは大部分が適当な時間見物しては立ち去る、という類の参加であった。これと同様、本ナーダムに集まった人々は多くがアルタンオボーに参詣してはいるものの、アルタンオボー大祭礼の時間はむしろ避け、各自が思い思いの時間に参詣している光景が印象的であった。また、それ以外には自分の関係している者が出走している競馬のゴール時や決勝近くの相撲など、各自の興味関心に従って見物を行い、余った時間にはアルタンオボー近辺の名所であるガンガノール（湖）やシリーンボグド（山）へ赴く、というのが特に筆者などと同じ行程でウランバートルから車を仕立ててやってきた人々の間に特徴的な行動様式であった。

一方、参加者についてであるが、このナーダムでは相撲に国家級「ザーン」の称号を持つような実力者もウランバートルから参加しており、競馬についてもスフバートル＝アイマクを中心に広域からの参加が認められた。例えば、西隣のオンゴン＝ソムからは、多くのオヤーチがナーダムの始まる2-3日前からオンゴン＝ソムを出発し、前日までにはすでにダリガンガ＝ソムに入って最終調整を行っていた。もちろん、これだけ広域から参加者が集まるということは、このナーダムの格式、つまりオーセンティシティーが高いことを如実に示している。そして、この格式の源泉は、いうまでもなくアルタン＝オボーの持つ格式である。なお、このオボーは直訳すれば「黄金のオボー」であり、これは黄金のガンジュール経を蔵していることに由来する、というのがダリガンガ＝ソム在住の老ラマ（元中学校教師）の説明であった。

アルタンオボーのナーダムにおいてもまた、ナイマーチンは必要不可欠な道

具立ての一つであった。もちろん、ソムのナーダムに比べて圧倒的に大規模なナーダムであるため、参集するナイマーチンの数もそれに対応した多数であったことはいうまでもない。また、彼らの営業場所は大別して二箇所であり、一つはナーダム広場付近、もう一つは見物人・参加者の幕営地であり、前者に関してはナイマーチンのトラックが軒を連ねて雑貨や食料品、飲料を販売する光景が見られ、後者については幕営する一般の見物人・参加者に混じってナイマーチンのテントや車が散在していた。なお、後者については見物半分、商売半分という人々であり、また同郷者を対象とする商売であったため、ウランバートルなどから仕入れてきた商品の少なからぬ部分が無対価での供応に消費されていた。

4. おわりに

以上、開催地こそ近いものの、非常に性格の異なるナーダム2事例の具体的なプロセスを紹介してきたが、そこから導かれるいくつかの共通点、および相違点を比較考察してみたい。

まず、見物人や参加者の行動原理についてであるが、彼らがナーダムに集まる動機としては「楽しみ」や「個人的な名誉」が大きな位置をしめており、ナーダムを主催する側とは一線を画していることは明らかである。また、前者の顕著な特徴としては、個人の興味関心、あるいは個人的な社会ネットワークを背景としており、仮にナーダムの進行に首尾一貫した秩序なり原理なりが存在するのだとしても、むしろ見物人・参加者はそれを断片化する形で享受——まさにナーダムの語源であるとされる「楽しみ」のレベルで——しているのである。

しかしその一方で、それではあるナーダムの格式、つまりオーセンティシティーを決定している要素は何か、という問題に突き当たることになる。これは、直接経験レベルでは「見物人・参加者数の多さ」に求めうるのだろうが、それでは何が多くの見物人・参加者を集めるのか、という問いが容易に想定しうる。おそらくその答えは、ソムのナーダムであればそれが「人民革命」の記念であ

り、国家ナーダム、つまり国家の威信と直結している点であり、アルタンオボーのナーダムであれば、アルタンオボーの持つ宗教的威信であり、さらにそれをモンゴル国政府が「モンゴルの伝統」として公式的に支持している、という事実であろう。逆に裏を返せば、そうしたナーダムに多くの人々がオーセンティシティーを感じ、見物人・参加者として参集するという事実こそが権威の主体に対する承認の表明であり、その意味において、主催者の動機はかなり迂遠な形ではあるが見物人・参加者、さらには個人的な利益を求めて集まるナイマーチンのレベルにまでも浸透しているのだ、とも言えるのではないだろうか。ここにおいて、一見ばらばらに見える各プレイヤーの織り成す、ナーダムという場におけるダイナミクスを統一的な視点から見渡すことが可能になる。

そもそも、牧民が散居しているモンゴルの地方社会においては「多くの人が集まる」という事自体が、常ならざる事態である。そこで可視化されるものは何だろうか。ソムのナーダムの場合、主催者も、見物人も、参加者も全てソムを共通項とする人々であり、それゆえ、ソムという地域社会が顕現するのだと考えられる。筆者は、ソムという地域社会の単位は本来的に人民革命党政権によって上から作られたものであるが、現状としてはすでに住民のあるレベルのアイデンティティをも担うまでの存在になっている点を別稿において指摘した(尾崎 1999:72)。そのプロセスにおいて、ソムのナーダムが提供する経験の果たした意義は無視し得まい。ただし、その具体的な論証に関しては、今後さらに見物人・参加者からの聞き取り調査が必要である。

一方、アルタンオボーのナーダムはどうだろう。このナーダムは、すでに述べたように1930年代に中止されたナーダムが復活されたものである。中止の直接的な理由はチョイバルサンによる宗教弾圧であると想像されるが、この時期には同時に、清朝時代以来存在した「ダリガンガ旗」というエスニックグループ名を冠した地域単位が公式の行政区画から消滅(1931年)している。それゆえ、このナーダムには本来的にダリガンガのエスニシティー、あるいは地方意識の発揚ないし復活としても読みうる道具立てが揃っている筈である。だが、現状としては、このナーダムはウランバートルのガンダン寺から招いたラマ、国

家ナーダムと同じ様式で行われる競馬、ハルハ式の相撲など、モンゴル（厳密には北モンゴル）の大伝統の再現として読み取られ、ダリガンガの銀細工が辛うじて地方の特産品程度の位置を占めているのみである。

ただし、現時点では、アルタンオボのナーダムが伝統をモチーフとしたものであるとは推測できても、その復活されたと思われている「伝統」が、かつてはどのような様態で実践されていたのか、という問いに対する答えを筆者は持ち合わせていない。かろうじて、ジャムスランの記述より、アルタンオボ祭りが毎年ダリガンガという地域単位の祭りとしてナーダムを伴い、行われていたことを示すのみである（ジャムスラン 1999：32）つまり、かつてのアルタンオボのナーダムに関する、いわば歴史的な研究であるが、この点についても今後の課題としたい。

註

- (1) 原文では「6月11日」となっているが、明らかに間違いなので筆者の判断で修正した。
- (2) 井上の原文には「盛り込まれた」とのみあるが、前述のマイダルの記述を勘案すれば「新たに盛り込まれた」というよりは「再び盛り込まれた」と解釈すべきである、との筆者の判断で「再び」という一句を追加した。
- (3) 筆者の実見したものとしては、1996年7月12日、赤峰市オニユート旗において開かれたガチャ主催、オボ祭りのナーダム（種目は相撲と競馬一種類のみ）や、1996年7月17日、シリングル盟アバガ旗で豊かな老夫婦が、二人の外孫の「3歳の髪切り儀礼」に付随して自費（2万元）で行ったナーダム、1998年8月2日、ウランバートル＝ナライハ間で行われた鉄道60周年記念ナーダムなどの事例を挙げることができる。また、今岡の報告によれば、1995年8月2日にバヤンホンゴル県ツェルゲルにおいて、85歳のトゴおばあさんの長寿を記念してナーダムが開かれたという（今岡 1995：29）。
- (4) 競馬で実際に騎乗するのは馬に対する負荷が小さい子供であるが、競争に適した馬を見出して調教し、ナーダムに出走させ、騎乗する子供に対してレース運びの指導をするまで、全てオヤーチによって行われている。
- (5) かつてのアルタンオボ祭りについてはジャムスランによる言及がある（ジャムスラン 1999：32-34）。
- (6) 四つの山とはボグドオーラ、アルタンオボ、オトゴンテンゲル、ボルハンアル

ダンである、とウランバートル在住（オンゴン＝ソム出身）のインフォーマントは語っていた。なお、アルタンオポーも低いながら山の頂上に設置されているため、「山」扱いとなっている。

参考文献

- ボルドー 1998 「ブフ（モンゴル相撲）からみるエスニシティーの一考察」『体育の科学』48(3)：207-212。
- 張承志 1986 『モンゴル大草原遊牧誌』梅村担（編訳），東京：朝日新聞社。
- 後藤富男 1956 「モンゴル族に於けるオボの崇拜」『民族学研究』19(3-4)：47-71。
- 蓮見治雄 1993 「文化・芸術・風俗」日本・モンゴル友好協会（編）『モンゴル入門』東京：三省堂，110-151ページ。
- 今岡良子 1995 「1995年，市場経済移行後の『ウーリン・トヤー』協同組合～バヤンホンゴル県東ボグド山ツェルゲルにおける調査報告～」『モンゴル研究』16：22-37。
- 井上邦子 1998 「儀礼における『歴史の始点』——モンゴル国ナーダム祭の変容と現在——」『椋山女学園大学研究論集』29号（社会科学篇）：227-234。
- ジャムスラン 1999 『ダリダンガ』ウランバートル（出版社不明，モンゴル文）。
- マイダル 1988 『草原の国モンゴル』加藤九祚（訳），東京：新潮社。
- 槇篤二 1941 「イホオーラの祭りとスルグ牛」『蒙古研究』3(3)：43-46。
- 水野清一 1932 「蒙古遊牧民の生活(二)」『民俗学』4(4)：74-90。
- 尾崎孝宏 1999 「世帯・親族と地域社会」島崎美代子・長沢孝司（編）『モンゴルの家族とコミュニティ開発』，東京：日本経済評論社，51-73ページ。